

やまぐち自然派宣言

共生の思想を深める⑥ 庫本 正

会長あいさつ 中村 裕三



共生

No. 18



会員だより

会員団体の紹介

森林インストラクター山口会

会長 山本 博

十種ヶ峰のヤマシヤクヤク報告

山口県山岳・スポーツクライミング連盟

会長 小林 弘之

ダルマガキの群生地再生をめざして

つのしま自然館 自然解説指導員 藤岡 達雄

第15回リレーミーティング in 宇部 報告

宇部自然保護協会 事務局 福場 達朗

お知らせ・編集後記

表彰受賞者活動紹介

山口きらめき財団理事長表彰

向島緋寒桜「蓬莱桜」保存会

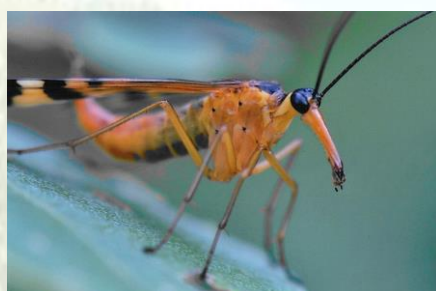
山口県女性活躍推進知事表彰

「女性のチャレンジ賞」

久保田 啓子

山口県環境保全活動功労者

岡 秀夫
佐伯 清美



やまぐち自然共生ネットワーク

平成31年1月31日

共生の思想を深める⑥

蛇と人間

庫本 正

最近私は「自然とは何か」を考え続けている。その第一歩は「人と動物との関係」を考えることから始まった。「日本人の動物観」「日本人の自然観」などの本を読みあさり、考えを深めた。そんな中で、私の心をつらえたのは、民俗学者 谷川健一さんの「蛇―不死と再生の民族」という本だった。

私たちは日常生活の中でたくさんの動物たちと触れ合っている。マムシやハブなどの蛇は危険な動物として、注意深く接触する。マムシに咬まれると、命が危険に晒されるからだ。

谷川健一さんは、八が岳の麓の井戸尻考古館で、縄文中期の「奇妙な土偶」に出会う。少女が頭にマムシを巻いたものだった。谷川さんはこの少女を「巫女」とみて、ここで「日本における神観念の黎明」を感じ取った。

また、奄美大島では、ノロがハブを制してノロの女従者の頭にハブを巻き付けること、さらに八重山では神女たちがハブを手渡しする神遊びから「巫女」が生まれたと考えた。このように人と蛇の間には「戦慄するよう

な親和力」が働いていることを知り、この力が「人」・「蛇」・「神」を自在に変身する世界を創出したと推考した。

日本人はクマや狼など、時に人を襲う動物たちを神聖視して祀ってきた。そして人と自然と神が響き合うおおらかな世界が生まれたと考えた。

*

私たちも、蛇のいる世界に住み、マムシにも日常的に触れ合って暮らしている。私はマムシの生活が知りたくて、飼育したこともある。餌にはシロネズミを与えた。長い期間飼育した結果、マムシは満腹状態では静かにしているが、空腹状態になれば、攻撃力が高まることを知った。マムシの好物を知るために捕獲すると、胃の内容物を調べた。ジネズミを好物にしているようだった。ジネズミは家にも入ってくるのでマムシも人家にくる。

昨年は、田の畦草刈りで、草に隠れていたマムシの体の一部を傷つけた。驚いて注意深く観察すると、腹部の一部が切れていて、そこから紐状のものがはみ出していた。これに注意深く引っぱり出すと子のマムシが二匹出てきた。胎生のマムシはかなり大きくなるまで子を体内で育てる。マムシ繁栄の秘密はこの育児法にあるのかもしれない。

田舎では、古老たちはマムシを捕まえると焼酎の入った一升瓶に入れて、傷の常備薬としていた。時には生きた目玉や心臓をすすって、強壮剤にもした。マムシは貴重な薬でもある。



現代社会では、神は消えかかっている。代わって、共生の思想のもとで、人は自然と共存する道を開いてきた。しかし私には、「神」と「共生」では、何かが違うように思えてならない。

谷川 健一著「蛇―不死と再生の民族」
富山房インターナショナル 二〇二二年。

会長あいさつ

会長就任のご挨拶

山口県樹木医会 中村 裕三

平成30年度通常総会で白井啓二前会長からバトンタッチを受け会長に就任しました山口県樹木医会の中村裕三と申します。微力ではありますが、皆様のご支援を賜り、お世話をさせていただきたいと思っておりますのでよろしくお願い致します。

本会は平成16年7月に設立され、今年で15年を迎えます。その間、自然に関わる活動をしている団体、個人のネットワーク形成を図り、総会、リレーミーティング、会報誌発刊、ホームページでの情報発信をしてきました。昨年は6月2日に山口県旧県会議事堂の議場で総会を開催。午後、山口市観光ボランティアガイドの方に山口市内の歴史に育まれた町並みを古地図持参で解説していただきました。いつもは車で素通りする道路の奥に潜む故事来歴を再認識できました。11月17・18日には宇部市で「第15回リレーミーティングIN宇部」を開催し、50名の参加がありました。小野湖のオシドリウォッシング、霜降岳登山等の興味深い内容に参加者から満足の声をいただきました。持世寺温泉「上の湯」での懇親会は、司会をお願いした

草野理事がギター、DVDを持参され、歌唱力をいかんなく発揮されました。ワンマンショの勢いで、来年のリレーミーティング会場は、萩市沖の見島で開きたいと提案されました。最後の落ちまで考えるエンターテナースピリットに脱帽。開催地は理事会で検討させていただき、皆様にご案内させていただきますので、ご参加の程よろしくお願いします。今回、無事閉幕できたのは、お世話をいただいた宇部市自然保護協会、関係者の方々のおかげです。誌面をお借りして厚く御礼申し上げます。

正月休みに依頼されている原稿を書きあげようとパソコンを起動しましたが、キーボードが沈黙。あきらめて、お神酒をいただくことにしました。銘柄は自然界で空気と共に大切な水の名前が入った上善水如（じょうぜんみずのごとし）。中国の思想家「老子」の第8章「最上の善は水のようなものだ。水はあらゆるものに恵を与えながら、争うことなく、人が嫌がる低い所に落ち着く」からその名前は付けられています。水は大地の作物を育て、人々の飲料となり、多くの利益をもたらしています。川の中にある大きな岩は流れを変えてかわす柔軟性を持ち、条件が悪い時には、誰も好まない濁った所や湿地に身をゆだねます。また、水は四角い器に入れば四角、円い器に入れば円くなり、どんな状況

にも対応する能力も持っています。「多くを求めず、何の意図もなく、他人と争わず、謙虚に生きなさい」と2000年以上前に老子は論じています。

水の循環は、空から雨が降り、山から川に流れ、海に達し、水蒸気となって空に帰ります。太古の昔から途絶えることなく続き、この仕組みのおかげで我々人類を始め地球上の生物の命が保持されています。自然の大切さはまだまだたくさんあり、枚挙に暇がありません。人間も自然の一部であることを忘れずにその一員として行動ができればと思います。



防府天満宮酒垂神社

表彰受賞者活動紹介

山口きらめき財団理事長表彰

向島緋寒桜「蓬萊桜」保存会

会長 大場 尚武

このたびは山口きらめき財団理事長表彰をいただき、会員一同感謝申し上げます。

防府市立向島小学校には、樹齢九十年を超す大きな寒桜があります。樹齢と言えど戦前戦後を生き抜いた古木と言えるのではないで



しょうか。寒桜については正確な由来は分かりませんが、およそ九十年前に当時の向島尋常高等小学校の卒業生が記念樹として植樹したという話が残っています。学校も敷地の広さや建物の位置も時代とともに移り変わり、寒桜が植えられていた場所もその時代時代で植え替えられているようでした。

寒桜は早咲きの桜で、毎年二月下旬から咲き始め、卒業式の頃には満開になり、続けて寒桜を楽しめます。平日も土、日、祝日も行政当局のご配慮により校庭を解放させていただき、保存会や地区民の協力を得まして学校の監視を行っておりまして、寒桜のそばまで行くことができます。

この寒桜は、平成十三年に市指定の天然記念物に、また平成二十三年には県指定の天然記念物に指定されました。寒桜が天然記念物として指定を受ける例は他になく、非常に珍しいものです。ヤマザクラとカンヒザクラの交雑種と言われ、審査ではその見事な枝ぶりや健康状態だけでなく、地元の人たちから注がれる愛情も評価されました。天然記念物に指定されてから毎年のように桜愛好者が増え

ております。平成十九年十二月には平成元年以後の育友会長十五人と樹木医一人が集まり『向島緋寒桜「蓬萊桜」保存会』が発足しました。寒桜を代表に向島全体を桜の木で彩られるよう



向島緋寒桜「蓬萊桜」保存会

に、平成五年に当時の教頭先生が寒桜の枝をソメイヨシノザクラに接ぎ木をし、平成二十年に二世を移植する作業を行いました。平成二十一年一月に現在の寒桜を見通せる運動場の南側に移植しまして、それを記念して「第一回向島蓬萊桜祭」をいたしました。本年で

「第十回向島蓬萊桜祭」となり、盛大に実施いたしました。

これからも寒桜がいつも元気で成長できるように樹木医さんの指示により、桜の枝が伸びている範囲を柵で囲い、有機肥料を混ぜたりして特に土壌改良に力を注いでおります。また桜には病虫害が発生した場合は、消毒を施したり駆除をしたりしております。保存会では、これからも寒桜の孫やひ孫となる苗木を育て、島民の協力を得て島中に植えたいと考えています。現在は向島運動公園にヨシノザクラや島の南側の山肌にはヤマザクラと色々な桜が楽しめます。いずれは向島全体が桜の名所となる日が訪れるかもしれません。



山口県指定の天然記念物

山口県女性活躍推進知事表彰 「女性のチャレンジ賞」受賞

あなたとNAGATOを結び隊

久保田 啓子

この度、「女性のチャレンジ賞」をいただき大変光栄に思っております。特にこれといった特徴のあることはしていない私が、頂いて良いものかとこそばゆい気持ちもあります。でも、「あなたのチャレンジは女性が自ら意欲と能力によって切り開いていくロールモデル」と、とても有難い言葉がありました。能力はありませんが、チャレンジ欲は大いにあり、興味を持ったことや声をかけていただいたことにどんどん飛び込んできました。

私のモットーはネットワークを広げることです。人と人の繋がりは、決してお金では買えない私の大切な財産です。いろいろな場で多くの方々と出会って繋がりを、チャレンジの機会をたくさんいただきました。それをやるのか断るのは自分で決めることですが、せっかくのチャンスを引きいたら終わりだと思いい、まずは一歩踏み出してやってみようという想いで、ワクワクドキドキ楽しみながら、今までできました。もちろん大変なこともあります、乗越えた時の達成感があるから、次のチャレンジができます。

また、家事も大手抜きで、いつも飛び回っている私ですが、理解ある家族に支えられ：

と自分では思っています。実際はたぶん「こいつには何を言っても無駄だ。母ちゃん元気で留守が良い。」とあきらめていると思いますが、感謝しております。

しかし、今、チャレンジしすぎてやることが多くなり、頭も身体もついていけなくなっていることを実感しています。周りの人に迷惑をかけてしまつては元も子もありません。今年も還暦、これを一つの節目として少しずつ整理をしなくてはと思います、本当にこれから自分がやりたいこと、その中で出来ることを考えてみました。いつも何かに追い立てられるように、目の前にぶら下がったことをこなしていく余裕のない生活。これを変えて、ゆっくりとしたペースで行くために、取捨選択を始めました。すぐには難しいこともたくさんあるため徐々にですが、二つの目標に絞りたいと思っています。

一つは、長門の自然、文化、歴史などを再発見し、その魅力と楽しみ方を多くの人に伝えたいという想いから、仲間とあなたとNAGATOを結び隊を立ち上げて以来、自分たちも楽しみながらコツコツと活動が続けて、10年目になります。それを継続していくこと。

最近、観光的な観点から、外部の人に「活動を継続するために自分たちが儲けなくてはダメだよ。」と言われ反発をしまいまし

た。必要経費はいただきますが、活動を楽しみにして参加して下さる方から、私たちが儲けることはできません。うちのプランは、公共交通機関を使い、温泉や食、名産品を紹介し、それを利用し買っていただくことで、地元に落としていただくようにしているからです。また、自然や歴史に触れることで、子どもたちに郷土愛を伝え、プラス、仕事も含め長門で暮らす良さと、自然を守るこの大切さを伝えていきたいと思っています。

もう一つは、子育て中の親子を応援すること。5年前に子育てがひと段落したおばちゃんたちで、家庭教育支援チーム「ふあみ」を立ち上げました。これもコツコツと活動を積み重ね、毎年、市内全小学校で就学時健診時に、子育て交流会を実施しています。また、県、市、学校、地域が連携して、乳幼児親子と中高生が触れ合う場「子育てひろば」を学校に作っていく取り組みにも関わっています。私の役割は、チームのメンバーが無理なく続けていけるようにコーディネートすることです。

この賞をいただいたことで、今の自分を見つめ直すきっかけになりました。私の性格からして、減らした分だけ増えていきそうな気がします、そこはぐっと踏み止まり選んでいきたいと思っています。

こうして榎野川の清流は守られた

榎野川流域連携促進協議会

岡 秀 夫

平成十三年二月、榎野川最大の支流仁保川の源流一帯で業者による産廃処分場設置の話が持ち上がった。

自治会の呼びかけに、想定される全地権者ご夫婦を含めた協議が続き、自分たちで集めたお金でこの土地を買い取ろうと言うことになった。

榎野川流域の行政、団体、各種グループ更に全国に住む村の出身者にも呼びかけるなどして、発議して僅か三百日足らずで、千二百十万円を山口市に寄付し、当該土地約五ヘクタールすべてを市有地にすることが出来た。

上流域では

山口市では、この土地に寄せる多くの人たちの熱い思いに応えるため、「四季の森公園」として整備す



大漁旗たなびく植栽作業

ることになった。

最近、「海の環境保全には上流域の山の保全が欠かせない」と活発な活動を展開中の「榎野川活性化交流会」の皆さんが積極的に参加してくださることになった。

なかでも、第一回の植林作業に大勢の漁協の皆さんが大漁旗を押し立てて参加された状況は今でも脳裏に鮮やかによみがえる。「連合山口」傘下の皆さん、各種団体グループの方々が家族挙げて、地拵え、植栽、数年にわたる撫育作業など数知れない多くの人々の汗が実って、現在四季の森は特に秋の紅葉は多くのハイカーで賑わい、仁保小学校の故郷探訪、仁保公民館の隠れた名所巡り、更に海外からの視察団の来訪などで賑わっている。

中流域では

市街地を貫流する中流域では、鮎を始め各種の自然遡上を助けるための魚道整備や、



イラン グルジア キューバなど視察団
平成 24 年 10 月

森林間伐材の魚礁、更に鮎の産卵場の整備など、一般市民特に子供の遊びと体験を組み合わせた学習の場の提供などを計画的継続的に取り組んで今日に至っている。

更に河川公園を中心に繰り広げられる河川清掃活動や漁協祭りは「鮎のつかみ取り」やモズクガニの「かに汁」更に「鮎の甘露煮」焼きたて熱々の「鮎の塩焼き」など広く県内外のお客様を魅了している。

下流域では

榎野川は延長三十km、流域三百二十平方kmを流下して周防灘の山口湾に注ぐ二級河川である。

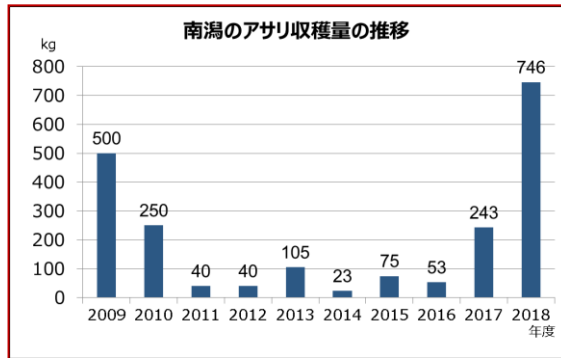
平成十六年この山口湾の干潟再生に官民挙げて取り組むこととなり、その第一歩として荒廃した干潟をスコップや熊手で掘り起こし底土に酸素を送り込みあさりの稚貝を育てようと言うことになった。

一見無謀とも思えるこの試みに、人々はただ黙々と汗を流し続けた。



榎野川河川公園一帯で例年の一斉清掃作業

この干潟耕
耘作業に上流
域の人々が多
数応援参加し
たことは申す
までもない。
その汗は、
少しずつしか
し確実に報わ
れてきた。



流した汗は確かに報われた



地域通貨フシノの取り組み

こうして培われた流域連携の絆を更に強固な物にする手立ての一つとして「やまぐちの豊かな流域づくり構想」で示された試みの一つ地域通貨の取り組みが始まった。

文字通り「暗中模索」「走りながら考える」方式で辿り着いたところは、ボランティアとして汗を流してくれた人たちに、「ありがとうの一言を伝えるための道具」と言うことに落ち着いた。

僅か四店舗の協力店で発足したこの試みは、四十一協力店にまで拡充され、新しい地域通貨の役割と言われるようになった。

おわりに

こうした多くの方々にご理解とご関心をお寄せ頂き、平成十七年度国土交通大臣認定「手づくり郷土賞」を。平成二十五年日本ユネスコ協会連盟「第五回プロジェクト未来遺産」に登録の栄にようにした。

更に今回「平成三十年山口県環境保全活動功労賞」を、不肖私がお受けすることとなり、この喜びを多くの皆様と分かち合いたいと、顛末の一端をご報告しご挨拶に代えさせて頂きます。ありがとうございました。



山口県知事賞・環境保全活動 功労者表彰をお受けして

里乃駅 ランプの宿

代表・管理人 佐伯 清美

この度、栄えある県知事賞を受賞いたしました。大変にありがたく思っています。ただ、この賞は、この僕だけのものでは決してなく、これまで、里山再生活動に協力してくださった、地元地権者の方々を始め、全国のボランティア仲間と共に受賞させていただいたと、今さらながら、貴重な仲間の存在に深い感謝の気持ちでいっぱいです。

平成7年に、ここ桂谷集落に足を踏み入れて以来、実に24年目、この間の活動状況をここで詳しく述べる紙面的余裕もないので省略しますが、なんと言いましても、当時66歳だった僕が、この春3月27日で、90歳・卒寿を迎えますことに、感慨深いものを感じています。

岩国の一寒村で生まれ育った僕は、13歳で出奔し、県庁に給仕として勤め、県鴻城高等学校前身の夜間中学に通い、戦争のさなか、学徒動員に駆り出されましたが、終戦を迎えると僕は、東京の大学に苦学して入学しました。そして、卒業すると、印刷出版の会社を興し、50年間、ふるさとを顧みず、働き、家族を養ったのです。望郷の念に駆られ、“ふ

るさと紀行”という、全国エッセイ誌を創刊しました。執筆者を求め全国行脚するうち、高度経済成長期の陰で乱開発された山野、田んぼ、河川の荒廃ぶりに驚き、ため息をついたものです。なんとか、日本の美しい森林、里地、里山を荒廃から守りたい、その一心で、候補地を探していた時、母校の県鴻城高等学校の小田譲亮氏に出会い、この桂谷集落奥の荒れ果てた山林、里地の再生、保全を依頼されたのが、そもそものきっかけです。ちょうど、国や県が、地方創世の旗印を掲げ、UJ Iターンを喚起していた時期でもありました。週末、東京から小郡に来て、テント生活から活動を始めた僕を支えてくれたのは、マネージャーの畑山静枝ですが、彼女の存在なくしては、この事業の継続発展はなかったといえるでしょう。僕は、彼女に感謝しながら、一番気がかりなことは、ここの後継者なのです。

幸いなことに、僕の長年の夢である、里山多目的ふれあいスペース“どんぐりの家”作りに、このほど、大勢の若者が応援してくれることになりました。僕はこの歳ですから、ネットは大の苦手な人間ですが、彼らは、スマホなど自在に扱い、「クラウドファンディング」なる、ネット駆使の手法で、全国にこの企画運営の趣旨を呼びかけ、足りない資金の調達を図ろうということになり、この春に

先駆けて、日本全国、いえ、世界に向けて熱い思いと公募を公開します。

僕の思いは、この自然豊かな里山を活用して、若いも若きも、集い合い、楽しく遊び、学び、未来へ繋げていきたい、そのためには、100歳までも生き抜いて、夢を達成し、若い者たちへ、バトンタッチせねば、と今日も老骨に鞭打って、労働に勤しんでいるのです。

今般、図らずも、先の（平成27年度）やまぐち自然共生ネットワークさまよりいただきました、“地域貢献賞”に引き続き、県より



H30. 11. 13 表彰式

のこの度の受賞は、応援してくれる仲間への大きなプレゼントにもなり、夢達成への拍車もかかりました。夢は強く思い続けていれば、必ず叶う、とは僕の口癖ですが、畑山マネージャーが、森のアスレチックで子供らと遊ぶ僕につけてくれたあだ名「珍獣」になりきって、僕はこれからも、夢に挑み続けたいと思います。

会員だより

会員団体の紹介

森林インストラクター山口会

会長 山本 博

森林インストラクター制度は、森林を利用する一般の人達に対し森林や林業に関する知識を与え、森林の案内や野外活動の指導を行うものとし、平成3年に農林水産省認定資格として創設されました。



これを受け「森林インストラクター山口会」(以下山口会)は、平成16年に、森林環境教育や森林保全に関する活動、会員研修、会員相互の親睦を目的に発足し、現在18名の会員が活動しています。

会員の多くは、各地の自然保護や森林活動を行う団体に所属し活動すると共に様々な依頼を受け講師や案内活

動も行っています。

また、山口会は「やまぐち自然共生ネットワーク」をはじめ、山口県の銘木滑マツの保全・再生に取り組む「滑マツ保存会」、木育活動に取り組む「やまぐちウッドスクール」

や「環境学習センター」に所属しています。山口会では年間十数回の活動を行っています。が、活動の多くは、これらの機関や「森林セラピー山口」、「下関市園芸センター」が主催する行事と連携し活動しているのが現状です。

森林インストラクター山口会の活動

(1) 森林観察と森の案内

森の不思議や生き物の繋がり、森林の役割などを伝える活動として「森林インストラクターと森歩き」と題して、季節に応じ、その場にある題材や手作りの小物を使い、楽しく解りやすく、各分野に詳しい会員が専門的な説明も取り入れた好評なプログラムです。

(2) 森のクラフト体験

イベント内での活動が多く、幅広い年齢層が対象になるためクラフト体験を実施することが多くなります。



この活動は、森の恵みや木の素晴らしさ、人と森の関係、木の利用などを伝えるため、参加者対話形式で実施し、同時に森や木に

関するクイズや展示なども行っています。

昨年は600人以上の参加があり、人気のクラフトは「森の動物ストラップ」、「森の動物ペンスタンド」、「木の実の標本箱」などですが、参加者が作品を持ち帰ってからも、木や森を常に意識し続けてもらうため、オリジナルで身近に使ってもらえる作品を提供するように工夫しています。

(3) 森林保全活動

昨年、森林セラピー山口の「森フェス」の中で、広葉樹林の間伐体験を、森林インストラクター会員が主体となり企画から指導まで実施しました。森林整備の必要性を楽しく安全に行うためのノウハウを持った会員も多く、今後、様々な方法で森林保全活動に取り組んでいきたいと思っています。



森林インストラクターの活動に参加された多くの人に森林や自然を知ってもらい、自然を大切にする心が芽生え、森の保全や活用に繋がっていかばと思っています。

十種ヶ峰のヤマシヤクヤク報告

山口県山岳・スポーツクライミング連盟

会長 小林 弘之

私も山登りを始めて50年近くになります。

若いときに初めて

登った北アルプス

で見た花々に感激

しましたが、その時

は山口の山中の花

の事など気づきも

しませんでした。



十種ヶ峰登山口の神角
(開花時期)

その頃は全国でスカイライン、スーパー林道の建設が多くあり、公害問題とともに建設反対運動があちこちで起きていました。

山岳会にも入り、山のことも自然のことも情報が多くなり、地元の山の花にも関心が向くようになりました。

そうした中、十数年前に徳佐の山岳会会員から十種ヶ峰にヤマシヤクヤクの晴らしい自生地があると聞き、通うようになりました。教えてくれた先輩、仲間とともにその自生地は教えられないなど言ってきたけれど、他では人から人へ、口から口へ伝えられたのでしよう、多くの人が来るようになりました。

来る人は年ごとに倍に、倍にと増えた。でも、誘導柵が無いので散策勝手、写真も好き

に撮影できる、花の近くの適当なところに腰を下ろして弁当も食べられ、自由？でした。



ヤマシヤクヤク

その上、このヤマシヤクヤク自生地は砂状土質の上、斜面なので登山靴で踏み込むと崩壊しやすく植物の根が傷みやすいのです。

こうした状況を有志が心配する中、山岳会を中心に「十種ヶ峰の植物を守る会」として、平成20年度に人づくり財団の県民協働型自然共生推進手づくり事業が受けられることとなり、県自然保護課と県農林事務所、当時の阿東町、森林組合、地元神角の方々の協力を得て、ヤマシヤクヤク鑑賞コースの柵作りを行う事が出来ました。

宣伝もしないのに観賞登山者は増え、団体

で、バスで、多くの登山者が来るようになりました。柵作りは本当に適宜なタイミングでした。助成制度に感謝しています。

当初は山岳会の者での作業でしたが、出来てからは各方面の有志で、登山補助ロープや川床沿いの道の整備等がなされてきました。



積雪による倒木の除去作業

写真は台風被害ではありません、積雪被害です。

その後、県の事業で鑑賞コースの柵が作り替えられ、また、立派な案内板も設置されました。その上、路上駐車解消のため、神角の皆さんの努力で駐車場、公衆便所も整備されました。

最大の被害は平成25年7月の集中豪雨で

した。山岳連盟会員が大半して、植物が息吹く前々に残雪の中、復旧作業も行いました。



集中豪雨被害のため注意看板



豪雨被害現場



残雪期に鑑賞路の修復作業

他県の山に登っていますと目的の山の登山口が分からないことが多々あります。地元、行政等が力を入れて案内標識を設置してくれているところは分かりやすいので助かります。

山口県にもやまぐち自然共生ネットワークが誕生し、手作り事業が有りましたので、山

岳連盟として岩崎元郎さんの「新日本百名山」に選ばれた東鳳翔山に道標設置事業も行いました。

山頂の標柱に「新日本百名山」を



東鳳翔山登山コース案内板（一部）

また、その後、東鳳翔山山頂付近に水場があり、保健所の飲用水質検査をしたところ「適」でしたので、「水場」の案内板を立てて道を整備しました。毎年、水質検査をしていましたが、4年目に大腸菌が検出されたので案内板を撤去することに・・・。

自然の中に人が多く入ることはどこかに変化が起きるものです。

「自然共生」の言葉を思うときに、北海道の幌尻岳に登ったときの事を思い出します。

下山後、平取（びらとり）でテント泊をし、近くのアイヌ資料館に行った時に、敷地内に



アイヌ民族の地鎮祭

付属の小屋を建設するに当たりアイヌの人達が地鎮祭を始めました。その説明の中で：『大和の人は地の神を沈めるために地鎮祭を行うようですが、我々の地鎮祭は、少し違います。我々が建てようとしているこの場所を「住みか」として来た植物、虫、蝶等の生き物と霊に退いていただかねばなりません、申し訳ない、許して下さいの祈り、そして悪霊除けの行事なのです』と。文字を持たなかったアイヌ民族の自然共生の中の生き様なのでしょうか。

我々、登山者も、そうした意識、マナーを持ってこれから益々、山歩きを楽しみたいです。

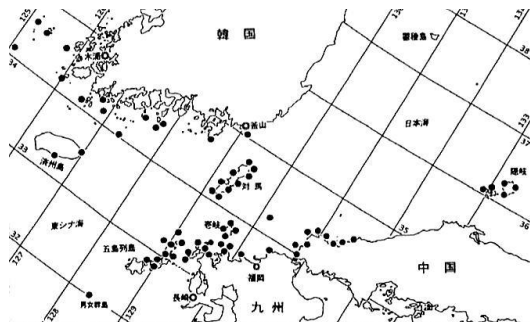
ダルマギクの群生地再生をめ ざして

つのしま自然館 自然解説指導員

藤岡 達雄

「ダルマギクが減っている」

そんな声をしばしば耳にするようになった。5年くらい前から急激にその数を減らし観光客がっかりさせているようだ。



(伊藤秀三 1997「総説・日韓海峡域の植物と植生の地理学」)

準絶滅危惧種としてあげられている。

特長としては、丈が低く座禅をしているように固まって岩場に生え、10月下旬から11月下旬にかけて薄紫または白花をつける。葉の表面に軟毛があり、葉が肉厚で潮風があたる場所を好む。かつて日本列島が

この植物は上図のとおり日韓海峡域に分布し、日本では主に北部九州から長崎にかけて生息する。本州では離島を除いてほとんど山口県よりにはかない花とされ、「レッツクやまぐち」に



～ダルマギク～

著しい場所では、ネザサがこの野草をとり囲んでおり、原因は明らかだ。

むかし、牧崎はその名の通り牛が放牧されていた。50年ほど前にはキャンプ場もあったのでいつも草刈りがなされ、人間生活と自然がよく調和した「里山」ならぬ「里海」だったのである。草原が放置され、それでバランスが崩れた。

なんとかこの群生地が再生できないか。



～ネザサ刈り作業のようす～

2～3年前にそういう意見が自然観察指導員会で出されてから毎年草刈りをすることになった。今年は、新たな試みとして角島小学校にも協力

を依頼し、学校で育てたダルマギクの苗を植えて付けた。写真は3～4年生による当日(平成30年11月)のようすである。



～牧崎でダルマギクを植える小学生たち～

これで安心ではなかった。海を泳いで渡ってくる逞しいイノシシたちに何度も掘り返されたのである。自然のこと、ここは「根くらべ」というわけで、繰り返し植え付け、今はなんとか定着してくれている。

秋の花としてダルマギクは角島には欠かせない野草である。昨年からは車イスでも鑑賞できるように誘導路の整備も始めた。

毎年、楽しみに来島されるみなさんにも小学生たちが植えたダルマギクを見ていただけるよう、これからも保護していきたい。



第15回リレーミーティング

in 宇部 報告

宇部自然保護協会
事務局 福岡 達朗

2年前の12月突然、県自然保護課の方よりリレーミーティングを是非宇部で行ってもらえないかとの問い合わせがあった。時期は総会も含め平成30年6月をとのことであった。今まで引き受けを見送っていたこともあり理事会で了承することとなった。しかし、せっかく来られるならば秋の小野湖へ来ていただき多くのオシドリの飛来を見てもらい、合わせて宇部市の里山である霜降岳の登山を行えたらと思ひ開催を11月とした。よって約1年余りの準備期間を経て開催日を迎えた。昨年は何かと山口県が話題となった。ゆめ花博の成功や東部の豪雨災害、夏場の太島での男児行方不明、ソレーネ周南での脱走犯逮捕、周防大島の橋崩壊による断水、そして私の中学校の先輩、本庶佑さんのノーベル賞受賞と維新150年にちなみ良くも悪くも話題になった。当リレーミーティングも関係者内で話題になるような内容にしたいものだ。

週間天気予報では雨マークが見られ関係者をやきもきさせた。当然雨天時のプログラムも考えているが出来ることなら雨になってほしくない。

厚東川ダムは1940年多目的ダムを目指して着工した。一時戦局の悪化により中断したが1950年に完成。日本で5番目に完成した歴史あるダムである。水没した地域の小野村にちなんで「小野湖」と名づけられたダム湖である。また宇部市・山陽小野田市の水道水原水や工場用水にも使われている。周囲を豊かな木々に包まれ、カヌー体験やボート大会も開催される。また日本有数のオシドリの飛来地で豊富なシイやカシなどのドングリは格好のえさとなっている。絶滅危惧Ⅱ類のトモエガモ、マガモ、カルガモ、コガモなどの数種類のカモに加え、カワセミやヤマセミ、カイツブリ、ミサゴなども観察できる。近年宇部市では、この地区を生物多様性保全地区として保全に努めている。

11月17日(土) 小野湖湖畔にある体験学習施設「アクトビレッジおの」に集合する。



アクトビレッジおの

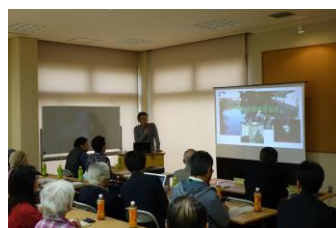
参加者は、2日間通じて50名。開会式後、宇部自然保護協会の行っている小野湖清掃作業を報告。44年間続いている活動を紹介した。続いて小野湖の水

を守る会より「まちなか家族の里山体験活動」宇部野鳥保護の会では「小野湖オシドリ保護活動の歩み」と宇部市の三団体より活動発表を行って頂いた。

昼食後、それぞれ車に乗合せて小野湖の水を守る会の活動拠点でもある「きずな農園」に移動し、津島事務局長の説明で栽培中のオリーブの木を見学した。熟したオリーブの実の油を手塗り、女性の皆さんはツルツルに満足された。



きずな農園



活動発表

次に下小野に移動しそこから歩いてオシドリの観察に行く。宇部野鳥保護の会の原田会長の説明を聞きつつ対岸を悠々と泳ぐ綺麗なオシドリを双眼鏡で観察し感激した。



オシドリウォッチング
in 小野湖

宿泊は、霜降岳と厚東川に挟まれた鄙びた宿 持世寺温泉「上の湯」に向かう。宿泊は23名。

上の湯は、秋篠宮殿下も宿泊されたことのある温泉宿で自家製豆腐が名物である。夕食後の交流会では遅くまで多くの方の活動をお聞きする良い機会となった。行っていることは違っても自然を守ろうとする気持ちは同じである。大いに参考になった。

交流会 持世寺温泉上の湯



18日(日)朝食後、男山山頂駐車場に集合し宇部山岳会の皆さんのご協力を頂き、霜降岳250mのハイキングを行う。参加者は、30名。曇ってはいるが雨の心配はなさそうだ。簡単なストレッチ体操後出発、いったん管理道に下りそこから前城246m、本城250mへと登っていく。この霜降岳には、179年厚東武光が霜降城を築いた。空堀や櫓だけの山城での中に大内弘世に攻められ落城した。すそ野が広く7つの山からなり1年を通じて市民の憩いの場となっている。本城からの展望はないがひっそりとした山頂に1等三角点がある。下山は埴池に下りていく。そこにはヌマスギ(ラクウショウ)が待っていた。数十年前に植えられた北アメリカ原産の落葉針葉高木で湿地を好み根元に気根を出す。周りの樹木とのコンストラクトが抜群である。お昼過ぎ無事に皆さん男山山頂に到着。お弁当を頬張りながら宇部市街の展望を眺めた。今回のリレーミーティングin宇部の開催

にあたりご協力いただいた多くの皆さんに感謝しこの2日間のリレーミーティングを終えた。土曜日は夜に雨、日曜日は午後から雨となり本当に幸運な2日間であった。



霜降岳登山

お知らせ

*ホームページについて

やまぐち自然共生ネットワークではホームページを作成し、情報発信を行っています。主催するイベントの情報、会報誌等を掲載しています。ぜひご覧ください。
ホームページ掲載希望の方は、広報担当にお知らせください！

*新規会員募集中！

十二月一日現在の会員数は次のとおりとなっています。

*団体会員 四十二団体

*個人会員 九十三名

自然に興味があるお知り合いの方はいらっしやいませんか。一緒にネットワークの輪を拡げましょう。

*平成31年度総会及び第16回リレーミーティングin見島(仮)

やまぐち自然共生ネットワーク平成31年度総会及び第16回リレーミーティングを萩市見島で行うことを計画しています。

6月～7月頃に開催予定です。
詳細が決まり次第皆様にご案内します！
お楽しみに♪



秋吉台



霜降山



向徳寺のアジサイ



小野湖



元乃隅神社

編集後記

いつの間にか年も明け、今年度もあと少しとなりました。やまぐち自然共生ネットワークの担当になって早3年が経ちます。多くの方と出会い、様々な場所を訪れることができました。山口県にはまだまだ知らないところが多く、新しい発見の毎日です。山口県のことをもっと知り、仕事に役立てられるよう、色々なことに興味を持って取り組んでいきたいです。まだまだ勉強不足ではありますが、これからも多くの方との出会いを大切にしながら、少しでも皆様の活動のお手伝いができればと思っています。本年もどうぞよろしくお願いします。

このたび執筆いただきました皆様には心よりお礼を申し上げます。至らないところもありましたが無事に編集を終えることができました。次号も暖かく見守っていただけると嬉しく思います。

会報誌へのご意見・ご投稿をお待ちしています。



広報担当 藤本

「津波」

キノとジヤは大の仲良しです。キノの家は農家で山の斜面にありました。ジヤの家はふもとの漁村にありました。ある日、大きな波がやって来て、ジヤの家族も漁村も流し去ります。

ひとり残されたジヤは悲しみを乗り越えなければなりません。ジヤはキノの家族に引き取られ、ふたりは兄弟のように暮らします。ある晩、ジヤが眠ってから、キノはお父さんにこう言います。「父ちゃん、日本に生まれて損したと思わんか?」「何でそう思うんじや?」「家の後ろには火山がある、前には海がある。その二つが悪いことしよう」と地震や津波を起こしよる時にや、誰も何もできません。いつもたくさんの人を亡くさにやあいけん。」「危険の真つ只中で生きるといふことはな、生きることがどれだけいいもんか、わかるというもんじや。じやが、危ない目にあつて死んだらどうする?人は死に直面すること、たくましくなるんじや、だから、わしらは死を恐れんのじや。死は珍しい事じやないから恐れんのじや。ちよつとくらい遅う死のうが早う死のうが、大した違いはねえ。だが生きる限りは、いさましく生きること。命を大事にすること。木や山や、そうじや、川や海でさえ、どれほどきれいかわかると。仕事を楽しんですること。生きること

の糧を産み出すんじやからな。そういう意味ではわしら日本人は幸せじや。」

この日本についての物語はパール・バックの思い出から生まれたものです。かつてパール・バックは海辺の丘の中腹にある小さな日本家屋に住んでおりました。ある夏、津波がやって来て浜辺の漁村が流されたのです。ですから、キノとジヤのこの物語は本当にあった話だと言えるかもしれません。今から71年前、1947年(昭和22年)にパール・バックが書いた感慨深い短文です。

東日本大震災から、幾度となく自然災害が発生し多くの犠牲者が出ています。ある偉い人がこう言われました。「必ず生まれたら死にます。しかし誰もが、今、死ぬとは思っていない。人間の死に方は四つしかない。病死、事故死、自殺、他殺あなたはどれがいいですか?この四つ以外に死に方はないのですよ。」

人生は、たとえ何百年生きても、仮に百年生きたとしても、この大宇宙の生命に比べれば、夢一瞬の短い世界。この短い人生に生きている以上は、山口県のすばらしい自然を守りながら、一瞬、一刻を価値高く生きましよう。

錦川流域ネット交流会

代表世話人 白井啓二

やまぐち自然共生ネットワーク

～次世代につなごう美しいやまぐちの自然～

事務局

〒755-0002

宇部市亀浦3丁目4-50-2 早川 善章

ホームページアドレス

<http://www.yama-kyou.net/>